The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ローマ字本キリシタン資料のオ段合拗長音表記 : 抄物の表記との対照を通して
Author(s)	竹村, 明日香
Citation	語文. 2011, 96, p. 56-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ローマ字本キリシタン資料のオ段合拗長音表記

——抄物の表記との対照を通して——

竹村　明日香

一　はじめに

ローマ字本キリシタン資料における日本語の綴字については、橋本進吉・土井忠生両氏をはじめとする諸先学の研究成果により、現今ではほぼ全容が提示された状態にある。しかしその中にあって未だ解釈が定まっていない例の一つが、オ段拗長音表記である。

当期のオ段拗長音は、開音（ŏ）を含む開拗長音と、合音（ô）を含む合拗長音に大別されるが、各行のうち、サ・ザ・タ・ナ行では、頭子音 x-, j-(I-), ch-, nh- に開合音だけを附して記すのに対し（例 xŏ/xô）、頭子音 b-, f-, g-, gu-, m-, p-, q-, r- をもつバ・ハ・ダ・ガ・マ・パ・カ・ラ行では、開合音の直前に i 又は e をも伴って表記する。その際、開拗長音は「-iŏ」、合拗長音は「-eô」の綴字を本則とするが、ごく稀に、開拗長音を「-eŏ」、合拗長音を「-iô」と、i・e を逆にした異例表記も交える点が不審とされてきた。例えば『日葡辞書』（本篇一六〇三年、補遺一六〇四年）では（1 a-b）の各二表記いずれもが本篇見出し語に標出されている。

（1）a　Qiŏri［本則］/ Qeŏri［異例］（開拗長音例「郷里」）
　　b　Qeôyô［本則］/ Qiôyô［異例］（合拗長音例「孝養」）

こうした各二表記については、同音異表記とみなす解釈に近年落ち着きつつあるが、稿者は、（1 a）の開拗長音表記「-iŏ」「-eŏ」には、音節頭子音の差に基づく出現の偏在があることから、両者には音声差が認められることを指摘した。[1] 本稿は、この結果を踏まえて、（1 b）の合拗長音表記「-eô」「-iô」にも音声差があると考えられることを述べるものである。

具体的には、-eô の e が、仮名遣いではなくエ段音の音声の反映であることを諸記述から示し（三・二節）、その上で、-eô と -iô にも音節頭子音の差に基づく出現分布が現れることを『日葡辞書』の用例を基に提示する（四・一節）。そしてこの分布が、室町期の抄物二書の合拗長音表記の様相とも一致すること（五・

一―二節)、また開拗長音表記 -ïō・-ëō の分布とも並行的であることから、-eō・-iō は、硬口蓋化の差の反映と考えられることを指摘する(六節)。なお以下、「合拗長音」と称するものは -eu の連母音が -yoo と拗長音化したものを指すが、当時、厳密にはまだ拗長音化が完了していなかった類も併せて指すものとする。

二　-eō と -iō の表記でゆれる箇所

考察の前に、合拗長音表記が -eō と -iō でゆれる箇所を確認する。それらは主に、次のような(2)の類に現れる。[2]

(2)　a　字音語

　　b　下二段動詞＋助動詞ウ・ウズル

　　c　ウ音便

(2a)は、Qeōfu〜Qiōfu(恐怖)、Reōri〜Riōri(料理)のように、字音仮名遣いで「イ段音の仮名＋ョウ」(以下、iョウ)、又は「エ段音の仮名＋ウ」(以下、eウ)と表記する字音語でゆれる類を指す。(2b)は、xizzumeō〜xizzumiō(沈めう)のごとく、下二段動詞から助動詞ウ・ウズルにわたる箇所でゆれる類を指す。そして(2c)は、xigueō〜xiguiō(繁う)や、arubeōmo〜arubiōmo(あるべうも)のような、ク活用形容詞や助動詞ベシのウ音便でゆれる類に相当する。

刊本資料の用例数をみると、圧倒的に(2a)の字音語が多く、(2b-c)は『平家』『伊曾保』等の会話体資料に偏る特徴がある。よって本稿では(2)全てを調査対象とするが、考察は(2a)を中心に行い、適宜(2b-c)も参照する方針をとる。

三　先行研究の整理と解釈の問題点

三・一　先行研究の整理

先行研究での -eō・-iō をめぐる解釈は、-eō の e の解釈の相違により、音声差を認める説と、認めない説に二分してきた。

まず議論の嚆矢となった橋本(一九二八)は、『ドチリナ・キリシタン』(一五九二年)のカ・ガ行に qeō, qiō,[3] gueō が、また他資料には guiō が見えることに着目し、この -eō・-iō の二表記には音声差があると推定した。その際、

(3)想ふに、エウ音が今日の如き yō 音となるには、eu eo ëō iō yō のやうな順序を経たのであらうが、此の書の出来た時代には、カ行以外の音[稿者注――サ行 xō 等]は既に iō 乃至 yō の段階まで進んで居たが、カ行に限つて、未だ ëō の段階に留まつて居たのではあるまいか。　(五四頁)

と述べ、-eō の e は、-eu>-yoo の拗長音化が遅れたエ段音の残存例と解釈した(同解釈に吉田一九三七、阪田一九五五がある)。

しかし表記と音声を直結させた右の解釈は、資料研究の進展に伴い高羽(一九五〇)や森田(一九五五・一九八〇・一九九三)から異を唱えられ、特に森田(一九五五)は、詳細に検討を加えた結果、-eō は仮名表記と関連をもつものという解釈を提示した。

その論拠は主に次の二点からなる。一点目は、『日葡辞書』の例言第四条にみえる、オ段拗長音表記に関する記述(4)である。

（4）（開拗長音をFiörö・Feörö とI字やE字で書くように）また，Fiö（豹），Qiö（興）などのように短音調［すなわち合拗長音］をもっている語でも同様にする。それは次のような理由にもとづく．すなわち仮名（Cana）文字では【中略】他方［合拗長音］をFeu（へう）と書くけれども，実際の発音においては，I字よりもE字の方に近いというわけではない。かえって上衆（Camixŭs）の発音によれば【中略】Fiö，Qiö などのように短音調をもっている語は，I音を用いてQiö と発音する方が，Qeö と発音するよりもすぐれているからである．しかし，仮名（Cana）による表記法に従ってE字で書くことも一般に行われているので，われわれは本書で，これらの語をば区別なくE字でもI字でも表記している．【後略】（『邦訳』五頁。［　］の邦訳注は一部私に改めた）

一重傍線部に従えば、-iö は、拗長音化してイ段音に近く聞こえた発音を写す表音表記であり、-eö は、「けう」のようなェ段音を用いる仮名遣いに即した表記であることになる。実際、当時の合拗長音の字音仮名遣いは、『落葉集』（一五九八年）や易林本節用集等においても、「けう」「てう」のようなeウ表記で統一する傾向にあることから（森田一九五五・二九頁）、-eö が仮名表記に従ったものとする記述も首肯すべきものと理解された。

二点目は、「活用語の基本形を同じ形に保つために、できるだけ～eö の形を用いる方針を採ったものと解される」（森田一九五五・三一頁）例が、『日本大文典』（一六〇四―〇八年）に散見することを根拠とする。例えば第一種活用動詞[4]の未来の条では、助動詞ウ・ウズルの後接例を説明する際、（5）のように、語根Ague（上げ）を意識的に揃えて記したかのような例が見える。

（5）○語根にö（ェう），özu（ェうず），又は，özuru（ェうずる）を加へる。例へば，Ague（上げ），Agueö（上げう），aguеözu（上げうず），又は，Agueözuru（上げうずる）。【後略】

（巻一7v「話しことばに用ゐる肯定第一種活用 ○未来」）

ほか、第二種活用動詞[5]の過去（巻一28v）や形容動詞［すなわち形容詞］（巻一47）でも、Saqueöda（叫うだ）、soneöda（嫉うだ）、xigueö（繁う）のように -eö が現れることから、-eö は、語根末がェ段音表記となる仮名表記に準拠して記されたにすぎず、実質、-iö とは「表記上の相違に留まるものではないか」（森田一九五五・三一頁）と結論づけられた。

この森田説には現在まで異論が出されていないが、本稿ではその問題点・反例を挙げることで、再考を促す議論を出発させたい。

三・二　解釈の問題点

森田説の第一の問題点は、-eö・-iö が「表記上の相違に留まる」という解釈に曖昧さが残る点である。この解釈を突き詰めると、結論として -eö は「-iö の同音異表記であるから、-iö と同じイ段音を表音している」か、あるいは、「仮名表記と関連させただけで、表記そのものは表音性をもたない」といういずれかの仮説に帰着することになる。ところがキリシタン資料に当たると、

このいずれの仮説にも相反する記述に行き当たる。例えば『日本小文典』（一六二〇年）では仮名二字の綴字について次のように説く。

（6）*Fiyo*（ひよ）、*Kiyo*（きよ）、*Riyo*（りよ）、*Kefu*（けふ）、*Nafu*（なふ）、*Kifu*（きふ）の綴字をもって書き、*Fio*（ヒョ）、*Kio*（キョ）、*Rio*（リョ）、*Keô*（ケゥ）、*Nô*（ナゥ）、*Kiû*（キゥ）と発音する。初めの四つはわずかにI（イ）またはE（エ）にふれて流音風に発音する。【後略】

（巻一8v.「単一綴字ふたつから構成された「澄み」の本源的綴字」）

これによれば、「けふ」を表わすkeôは、「わずかに【中略】Eにふれて流音風に発音する」というのであるから、-eôのeは明らかにェ段音を示していることになる。もっとも『日本小文典』は、「古い言ひ方を尚ぶ傾向」（土井一九四二・三二五頁）が強いため、「けふ」をェ段音で発音することがそのまま当時の口語を反映しているとはいい難いであろう。しかし、keôの綴字が「Eにふれて流音風に発音する」という説明自体は、口語・文語の差に左右されるとは考え難い。とすれば-eôは、ェ段音を示す表記であって、-iôとは完全な同音異表記とはいえないことになる。

このように-eôがェ段音を表すことは、実は前掲の『日葡辞書』例言（4）でもすでに垣間見られている。（4）点線部「Qiôと発音する方が，Qeôと発音するよりもすぐれているからである」[7]という記述に注目したい。ここでは、-iôと-eôが発音として比較されており、劣勢ながらも、-eôの発音が比較対象として存在していたことを暗示している。したがって以上を総合すれば、-eôは、イ段音と同音であるとも表音性がないともいえず、むしろ確かにェ段音を存しているといい得るのではないだろうか。

また第二に、活用語の語根を揃えるために-eôが使用されたという解釈については、前掲（5）『日本大文典』の記述そのものから反例を挙げることができる。（5）の後半は次のように続く。

（7）Te（て）に終る語根はteô（てう）、又は、chô（ちょう）に、【中略】gi（ぎ）はgiô（ぎょう）に、je（ぜ）, ji（じ）はjô（ぜう）に、xe（せ）、xi（し）はxô（せう）に変る。

傍線部に即して説明すると、例えば「立てう」ならばtateôかtachôに、「交ぜう」ならばmajôに、「せう」ならばxôとなることを述べている。もし語根を揃える目的で-eôを用いていたならば、なぜ「立てう」はtateôのみに、「交ぜう」はmajeôに、「せう」はxeôとならないのだろうか。コリャードの『日本文典』（一六三二年）では、同内容をより明確に記し、-eôを付加しない例とする例の違いを、（8）の通り示す。

（8）もし動詞の語根がte（て）で終るならば，この綴りをteô（てう）又はchô（てう）に変えて未来形を作る。例．Táte, uru（立て，つる）の未来形はtáteô（立てう）又はtachô（立てう）。【中略】もし語根がxe（せ）で終るならば，それはxô（せう）に変えられる。例．Xi（し）：xô（せう），

maraxi（まらし）：maraxô（まらせう）。【中略】しかしe（エ）で終るその他の動詞の語根には，未来を作るために，その後にô（オう），ôzu（オうず），ôzuru（オうする）がおかれる。例．ãgueô（上げう），ãgueôzu（上げうず），ãgueôzurù（上げうする）。【後略】

（20頁，「第一活用の未来形について」）

まとめると，第一種活用動詞の未来形では語根末の差により，ウ・ウズルと融合して拗長音化する類としない類があり，-eô はその後者に限って現れていたと考えねばならない。すなわち，語根末が xe・je・te の場合には，ウ・ウズルと融合して xô・jô・chô[8]の拗長音に転じたのに対し，be, fe, gue, me, pe, qe, re では，融合しないために -ô・-ôzuru がそのまま付加され，結果，語根末と助動詞の連接部分に -eô が現れたということである。なお，しばしば指摘されるように『日本小文典』（巻一 f19-20 他）では，Tateô（立てう），Saxeô（させう），Majeô（交ぜう）のようにすべてを -eô で揃えているが，これらは「五音」と「仮名遣」に配慮して記したことを冒頭で説明している（巻一 f19）。『日葡辞書』もこの書と同様に仮名遣いに配慮して -eô を使用していたならば，すべての第一種活用動詞で -eô が現れるはずだが，実際は，『日本大文典』の記述（5）（7）に等しく，動詞の語根末の差で記し分けている。[9]

（9）a　Ide mono mixô.（いでもの見せう）

（本篇「Ide（いで）」）

b　Vochitçuqini nanzo agueôzu.（落着きに何ぞ上げうず）

（本篇「Vochitçuqi（落着き）」）

この点に鑑みても，『日葡辞書』の -eô にもやはり，エ段音の残存を読みとる必要があるように思われる。

また『日葡辞書』では，本篇見出し語「Feô. 1, fiô（豹．または，豹）」の条の注記においても，-eô からエ段音を読みとられることを意識している節がある。

（10）この語［豹］のように，日本の文字［仮名］で書く場合に，えう（eu），で始まるか終わるかする語は，われわれは通常これをe字を使って表記する．ただし，その発音はe（エ）よりもむしろi（イ）に近くなるのであって，そのことは上記Fiô（豹）の例でも見られるとおりである．【後略】

傍線部中の「上記Fiôの例」とは，見出し語「Feô. 1, fiô」のfiôを指す。つまり，「豹」のような拗長音化が進行していた音節では，-eô だけで見出し語に挙げていては拗長音化していないエ段音に理解される恐れがあるため，あえて -iô でも挙げることで，拗長音化していることを明示したものと考えられるのである。

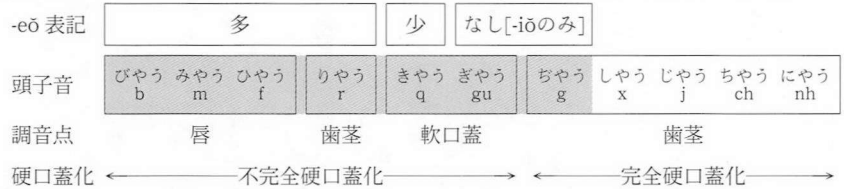
以上の解釈が妥当であれば，-eô と -iô は拗長音化の差を示しており，両者の音節数を分析することで，どの頭子音で拗長音化が進行していたかを把握することが可能となる。こうした調査に関しては未だ先行研究がないが，稿者は，開拗長音 -iô・-eô の分布結果を以て，合拗長音の -eô・-iô にも音節頭子音の差に基づく分布が現れると予測する。

【表１】『日葡辞書』の開拗長音 -eõ・-iõ の音節頭子音別出現分布（※（　）は説明文）

		b- びやう	m- みやう	f- ひやう	gu- ぎやう	g- ぢやう	p- ぴやう	q- きやう	r- りやう	合計
-eõ	本篇	6（11）	11（9）	35（7）	0	0	0	7（2）	21（12）	80（41）
	補遺	0	9（4）	2（0）	0	0	0	0	15（6）	26（10）
-iõ	本篇	82（46）	79（62）	43（19）	105（85）	70（34）	1（2）	135（107）	125（62）	640（417）
	補遺	6（2）	12（6）	7（2）	15（10）	11（3）	0	28（17）	27（5）	106（45）

※p-（ぴやう）は用例数が三例と僅少なため、考察からは除外した。

【図１】『日葡辞書』の開拗長音異例表記 -eõ の多寡と、音節頭子音の調音点の対照図



※網掛け部分は、「頭子音＋〈i 又は e〉＋õ」の形式で表記する類

『日葡辞書』での開拗長音 -iõ・-eõ の分布は、【表１】【図１】の通りである。【表１】は音節頭子音別の全用例数、【図１】は異例表記 -eõ の多寡と音節頭子音の調音点を対照させた図を示す。

【図１】を参照すると、-eõ の多寡は、音節頭子音の調音点により決定していることがわかる。-eõ は唇音（b-, m-, f-）やラ行歯茎音（r-）に頻出するが、カ行軟口蓋音（q-）には乏しく、ガ行軟口蓋音（gu-）とダ行歯茎音（g-）には現れない。この -eõ の出現の規則性は、『日葡辞書』に限らず、キリシタン資料全般に認められるものである。資料全体で同一分布を示すということは、この規則性が、印刷の過誤や編者らの表記規範の差ではなく、音声的要因に基くことを意味するとみてよい。

その音声的要因とは、硬口蓋化の差と考えられる。なぜなら -eõ の分布と硬口蓋化二種（不完全硬口蓋化・完全硬口蓋化[10]）を対照させると（【図１】）、-eõ は不完全硬口蓋化を生じる頭子音にのみ出現し、完全硬口蓋化を生じる頭子音には現れないという明瞭な関連性が見出せるからである。

不完全硬口蓋化とは、硬口蓋化の際、非硬口蓋子音がその主要調音点を変化させず、副次調音として［j］を付加する現象を指す（例［bʲi］,［kʲi］等）。これには非前舌子音の唇音や軟口蓋音が相当する。他方、完全硬口蓋化とは、硬口蓋化により、非硬口蓋子音の主要調音点が硬口蓋方向へ完全に移動する現象を指し（例［ɕ］,［ɲ］等）、この類には前舌子音の歯茎音（ラ行以外）が相当する。つまり硬口蓋化での前舌の関与の差により、各音節頭子音での

-eô の多寡が決定していると解されるのである。こうした硬口蓋化は、拗長音・拗短音を問わずに生じるものであるから、実際『日葡辞書』では、Qeogon（虚言、本篇見出し語）、Ximeacu（死脈、補遺見出し語）のように、オ段・ア段拗短音のうち不完全硬口蓋化を生じる子音に限ってeの例が現れている。

以上の結果からみると、開拗長音と対になる合拗長音でも、硬口蓋化により【図1】と似通った分布が現れると予測される。次節ではこの予測に基いて調査・考察を行うこととする。

四　ローマ字本キリシタン資料の合拗長音表記

四・一　『日葡辞書』

『日葡辞書』[11]の合拗長音 -eô・-iô を、本篇と補遺、見出し語と説明文（見出し語以外全て）に区分し、前出（2）の全用例を音節頭子音別に分類したのが【表2】である[12]（用例数は音節数）。

表から明らかなのは、g- に -iô しか現れないことである。これは開拗長音の g- に -iô しか現れなかった結果と等しい（【表1】）。

さらに【表2】から、字音語の用例数だけに絞って[13]各音節頭子音での -iô の割合をみると、giô100％(53/53)＞guiô 80.6％(51/63)＞fiô 49.4％(41/83)＞qiô 36.5％(58/159)＞riô 29.9％(35/117)＞biô 22.7％(5/22)＞miô 20.7％(6/29) となる。

注目されるのは g- に次いで gu- での -iô の割合が高い点である。字音語での gu- は全体として -iô を主とするが、そればかりでなく、-eô・-iô 両方で記す語でも -iô を優先する向きがある。

【表2】『日葡辞書』の合拗長音 -iô・-eô の音節頭子音別出現分布（※（　）は説明文）

		b- べう	m- めう	f- へう	gu- げう	g- でう	p- ぺう	q- けう	r- れう	合計
-iô	本篇	4	3（1）	34（6）	28(19)	28(13)	4	28(19)	18(30)	147(88)
	補遺	1	1（1）	0（1）	5（1）	8（4）	1	10（1）	7（1）	33（9）
-eô	本篇	12（8）	17（2）	25(12)	12（3）	0	2	58(34)	40（9）	166(68)
	補遺	1（1）	3（1）	3（2）	1（1）	0	0	10（6）	15（5）	33(16)

※他、neô 3 例（見出し語 amaneô 遍う，suneô 拗ねう［補遺］、説明文 Sonemi，u，neôda 嫉み，む，うだ）、teô 1 例（説明文 Vtateô うたてう）がある。ただし全て活用語であり、語幹保持により拗長音化が遅れていた可能性があるため考察からは除外した。

例えば見出し語では、同一語を -eô・-iô の両方で掲げる九語のうち、六語は語頭 Gueô- で現れるが（Gueô［御宇］Gueô［業］Gueôqi［澆季］Gueôr-axij［げうらしい］Gueôtai［凝滞］Gueôxô［巧匠］）、このうち、Gueô［御宇］を除く残り五語は、採録された本篇G部において実質的な役割を担っていない。五語はいずれも「Vide, Guiô.（Guiô［業］の条を見よ）」のように -iô の条への誘導注記が付されるにとどまり、語義説明はすべて -iô の条の方に与えられている。この扱いによっても、gu- は -iô を優先していることが窺える。

なお森田（一九九三・二三一－二三二頁）は、上述の Gueô- を収める本篇G部では、合・開拗長音ともに -iô・-iô の表記をとる傾向にあり、前部F部での

-eô・-iô、-iô・-eô を併用する様相とは著しく異なることから、F〜G部間で部担当者の表記規範の差が現れていると解釈する。しかし全数調査を行うと、gu- は本篇G部に限らず、辞書全体で -iô を優先していることがわかる。なぜなら、-iô 表記をもたない字音語の見出し語は、僅か三語しかなく（Gueô［御宇］、Sagueô［作業］、Sangueô［三教］）、他の三二語は字種に関わりなく、全て guiô 表記の例をとるからである。また説明文でも、gu- の字音語は全一七語中一六語までが -iô で現れる（-eô 一例は「御宇」）。その中には、gu- を含まない見出し語の例文に突如現れる例や、ゥ音便に記された例まで見える。

(11) Qiôron Xoguiôno manacouo sarasu.（経論聖教の眼を曝す）（本篇「Qiôron（経論）」）

(12) P.（詩歌語）i, Xiguiô.（すなわち，繁う）（本篇「Xinoni（しのに）」）

他方、見出し語の b- や m- では、-iô で積極的に記されているとは言い難い。-iô は、b- の全一六条中五条（五語）、m- の全二二条中四条（四語）と、僅かに現れるものの、特徴的なのは、「1,（または）」という略記号で -eô と併掲される例が皆無な点である。

(13) a Gobeô（御廟）、Beôbô（渺茫）、Beôxi（苗子）

b Meô（猫）、Qimeô（奇妙）、Meôto（夫婦、補遺）

さらにゥ音便でも -iô が用いられることはなく、全体として -eô を基調としている。

対して q-, r-, f- では、-eô と -iô を「1,（または）」で併掲する例が、q- に七条（七語）、r- に五条（五語）、f- に二二条（二二語）あり、-eô と -iô でゆれていたことを窺わせる。

(14) a Fuqeô. 1, fuqiô（払暁）、Icqeô. 1, icqiô（逸興・一興）

b Reô. 1, riô（竜）、Temareô. 1, Temariô（手間料）

c Feôxet. 1, fiôxet（氷雪）、Ifeô. 1, ifiô（異表）

以上からすると、合拗長音もおおよそ開拗長音の【図1】と等しい分布を示しており、g-, gu- では -iô を頻用し、b-, m- では -eô に偏り、その他では -eô と -iô の間でゆれていることになる。

四・二　他のローマ字本キリシタン資料

では前節の『日葡辞書』で確認したような、音節頭子音差に基く -eô・-iô の出現分布は、他資料でも確認できるのだろうか。その調査結果が【表4】である（調査資料名は稿末に記載）。

結論から述べると、g- が -iô で統一されている以外、『日葡辞書』と共通する特徴は見出せない。例えば『ヒイデス』では meô よりも miô が多く、『平家』でも字音語では biô がまさる。また guiô も多用されているとはいえず、『羅葡日』にややその傾向を見出せるが、用例数が少ないため確証とはしがたい。

しかしまた一方で、『日葡辞書』と似た分布を示す資料もあり、例えば『日本大文典』（表では除外）では、字音語に限れば -iô の出現する音節頭子音が『日葡辞書』と大方等しく、gu- が47.0％（8／17）、ほか f- が50％（1／2）、r- が11％（1／9）、qu- が

【表４】他のローマ字本キリシタン資料における合拗長音 -eô・-iô の音節頭子音別分布

刊年	作品名（略称）	b-		m-		f-		g-		gu-		q-		r-	
		-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô	-iô	-eô
1591	サントス		3 [1]		21	1	5	20		3	44		61 [1]		25
1592	ドチリナ							45			2		6		
	ヒイデス			28	14			180	1	5	28	2	35	9	12
	平家	7 [3]	4 [12]	[3]	3 [20]	2		67		2	2 [17]	4 [1]	34 [32]	2	5 [163]
1593	伊曾保	[2]			3 [5]	1		2			1 [10]		11 [6]		6 [26]
	金句集				[2]			[1]			1		3	2	2
1595	羅葡日	5	8	1	6	15	15	14		3	1	13	16	17	78
1600	ドチリナ							69			2		1		
1607	スピリツ				8	1	1	95			1		45	1	38
1632	懺悔録				[2]			10			[8]	3	1 [2]		[8]

※１　上段（あるいは一段のみ）は字音語の用例数、下段の［　］はウ音便と下二段動詞の助動詞ウ・ウズル後接例の合計用例数。

※２　『コンテムツス・ムンヂ』（1596年）は -iô が出現しないため表から除いた。

※３　『ヒイデス』『平家』『伊曾保』は、言葉の和らげも含めた用例数。

※４　『ヒイデス』には geô（条、Ⅱ200）が１例あるが、他資料では一切 geô が見えない。誤植の可能性も考えられる。

※５　p- は本文脚注（12）の理由から除外した。また『平家』『伊曾保』にみえる deô（出う），tazzuneô（尋ねう）等の deô，neô、及び『平家』『懺悔録』にみえる saxeô（させう）等の xeô も本調査では除外した。

※６　【表４】と『日葡辞書』の -eô・-iô 分布が一致しない要因については、資料性の違いが反映しているとも推測される。『日葡辞書』では辞書という性質上、混在する音声の秩序をできるだけ示し分けようと努めたのに対し、物語類ではそうした点が格別重視されなかったため、混沌とした様相がそのまま提示されたとも考えられるのである。

5.2％（2/38）見えるものの、b-, m- では各十音節、六音節中に -iô はない。こうした表記上の傾向は、果たして音声上の実態を反映したものなのかどうかを検証するため、以下では『日葡辞書』の結果を抄物の表記と対照させて考察することとする。

【表5】成簣堂本『論語抄』における合拗長音の仮名遣い

仮名遣	＼行	b-バ	p-パ	m-マ	f-ハ	gu-ガ	g-ダ	q-カ	r-ラ	xô サ	jô ザ	chô タ	nhô ナ	合計
iョウ	訓点	−	−	−	−	4	−	19	4	44	8	3	−	82
	仮名抄	−	−	−	−	7	−	18	−	10(1)	2	2	−	39(1)
eウ	訓点	6*	1	−	1	1	−	3	1	2	2	15	−	32
	仮名抄	5	−	(1)	3	−	−	1	−	9	1(1)	3(1)	[2]	22 (3)[2]

※1　（　）は下二段動詞へのウ・ウズル後接例。［　］はウ音便。他は字音語。
※2　*「ヘヨウ〔廟〕（巻二28ウ）」の振仮名をもつ1例は除外した。

五　抄物の合拗長音表記

五・一　成簣堂本『論語抄』

本書は「文明七［1475］」年の識語をもつ全十巻五冊の写本で、室町期の語彙・語法を伝える資料として名高く、表記面でも目を引く点が多々ある。例えばハ行転呼をア・ワ行で写す例が頻繁に見えるほか（他国ェュク［巻六31ウ］）、オ・ヲをすべてヲで統一するなど、キリシタン資料のローマ字綴りと並行的な仮名遣いが随所に確認できる。よって合拗長音でも表音的な表記傾向が少なからず期待されるものである。

合拗長音表記については既に出雲（一九六一）に字音語の調査があるが、本稿では、字音語の再調査も含め、前掲（2）の類を悉皆調査した。用例は論語本文の訓点部分（以下、訓点）と仮名抄部分（以下、仮名抄）に分け、各音節の行ごとに区分した。その結果が【表5】である（以下、歴史的字音仮名遣いは〈　〉、本書の用例は「　」で表記する）。

【表5】から明白なのは、唇音のバ・パ・マ・ハ行にはeウしか現れない点である。字音語では、バ行に廟・庙〈ベウ〉の二字、パ行に瓢〈ヘウ〉の一字が現れるが、訓点・仮名抄いずれにおいても、本来の字音仮名遣いであるeウのまま現れる。

(15) a　宗廟之事　如　會　同　（巻六33ウ）
　　b　ソウベウノコト、ワ人君マツリノコトナリ　（巻六33ウ）
　　c　一簞　食一瓢飲　（巻三20ウ）

またハ行では、瓢〈ヘウ〉、憑〈ヒョウ〉の二字があるが、この行では本来iョウの憑までもがeウで記されている（16b−c）。

(16) a　タ、コレ一ツヘウタン一ツトハカリ　（巻三20ウ）
　　b　子曰暴虎憑河　死　而無レ悔　者　吾　不レ與也　（巻四32オ）
　　c　大河ヲ舟ナクシテワタルヲヘウガト云　（巻四32オ）

ところが対照的に、ガ行ではiョウが著しく、堯〈ゲウ〉、業〈ゲフ〉の二字がありながら、eウは（17a）前半の「堯」一例のみで、残る堯九例、業二例はすべてiョウでしか現れない。

(17) a　子曰大哉　堯之　為レ君也巍々乎　唯天　為レ大　唯堯則　之　（巻四49ウ）
　　b　学業ユタカニタルトキハ　（巻十32ウ）

そしてサ行でも同様にiョウが過半数を占める。eウがiョウで現れる例は、少、小、召、蕭、昭の五字種三十例（訓点二四、

仮名抄六）あるが、うち二六例（訓点二二、仮名抄四）までが（18）のようにiョウで表記されている。[14]

（18）a　小童ハヨウショウノ名ナリ　［幼少］（巻八56オ）
　　b　陳司敗問昭公知レ禮乎（チンシハイトウクレロウコウシリレレキヲヤ）　（巻四39オ）

こうした行による表記差は、助動詞ウ・ウズルの後接例にも確認でき、マ行下二段動詞では（19）のようにeウとなるものの、サ変動詞では（20）のようにiョウとなる。

（19）モシキマ、テシタランコトヲアラタメウカ　（巻一11ウ）
（20）容只（ハウ）ハヨケレドモナニモショウハ仁道カケタリ（巻十33オ）

以上を要するに、バ・パ・マ・ハ行ではeウが頻用され、ガ行及びサ行ではiョウが多用されていることになる。これは、『日葡辞書』でb-、m-にe͂oを多用し、gu-にi͂oを頻用し、サ行のx-では拗長音を表すxo͂を専用していた表記傾向と通じる。

出雲（一九六一）は、本書の合拗長音表記が当時の支配的なeウ表記とは反対方向にあることから、「当時の発音に近く表記しようとした」（一一八頁）と解釈し、中でもバ・ハ行にiョウが無いのはこれらの行で拗長音化が遅れていたためと推定するが、『日葡辞書』の分布と一致することから考えてもこの見解は支持されると思われる。なおeウの拗長音化完了の時期については、鎌倉時代以前（迫野一九六八）、或いは室町初期まで（高松一九七一）とするなど諸説あるが、仮に拗長音化が完了していたとしても、こうした行による書き分けが現れるには何らかの拠りどころがあったと想定せねば難しく、しかもその分布が資料性の異なる『日葡辞書』と一致することから推測するならば、やはり本書は発音に基いて記されたとみるのが穏当であろう。またその分布結果から推測するならば、合拗長音では頭子音の差による拗長音化の遅速があり、唇音では遅れ、ガ行軟口蓋音やサ行歯茎音では進行していた可能性が高いと考えられる。

五・二　『杜詩続翠抄』

前節の資料と同傾向を示す書は全二十巻写本の『杜詩続翠抄』である。成立は永享九［1437］年からおよそ嘉吉三［1443］年、江西龍派［1375-1446］の講義を元に臨済宗一山派の文叔真要［生没年未詳］が抄した現存最古の杜詩注釈書である（太田一九九九）。本書には助動詞ウ・ウズルの用例が一定量見え、その中には、「非標準的な」オ段拗長音表記が現れることが高見（一九七七）に報告されているが、それらは次のようなサ行に偏在している。

（21）a　イカニ甾メソショウスラウヤカテ帰レ　（巻一五32ウ）
　　b　況満身病又老後ナニト我ヲショウソ　（巻十5オ）

これらの「ショウ」が、現代語のような「シ・ヨウ」ではなく、拗長音であったことは、次の「参らせう」の例からも窺える。

（22）a　王三盃ノアケクニ屮堂ヲ葺テマイラショウト云テ　（巻八31ウ）
　　b　北狄ヲ滅シテマイラショウト申スホトニ　（巻一六10ウ）

上記の例に対し、他の頭子音では、iョウとした例は現れない。

(23) a　ナサケカケウス者ハナサケヲカケイテ　（巻四16オ）
　　b　匂ニトカハ無スンテニトカメウトシタヨ　（巻一五36オ）
　　c　ナニトテ贈タソクレウト云テ　（巻八31ウ）

既出のキリシタン資料での記述(5)(7)(8)と照合しても、サ変動詞では xô（せう）、maraxô（まらせう）と拗長音で記すのに対し、他の頭子音ではエ段音を残す -êô で表記するという内容に等しい現れ方をしている。助動詞ウ・ウズルが後接する場合にも、やはり頭子音の差により、拗長音化しやすいものとしにくいものがあったことを窺わせる結果が現れているといえる。

六　解釈

以上、ローマ字本キリシタン資料での -eô・-iô と、抄物二書でのeウ・iヨウの分布を対照させると【図2】のようになる。【図2】からは、-êô とeウ、-iô とiヨウがほぼ並行的に出現していることが確認できる。すなわち、唇音では -êô とeウが頻出するが、ダ行歯茎音やガ行軟口蓋音では -iô やiヨウ表記が目立ち、ラ行歯茎音とカ行軟口蓋音はその中間にあって、極端な偏りはない。

以上からすると、-eu > -yoo の拗長音化では、橋本（一九二八）が指摘した通り、音節頭子音の差により進行の遅速があったと推測される。[15] 歯茎音（ラ行以外）ではいち早く拗長音化が完了していたために chô, giô のような拗長音表記が採られ、またガ行軟口蓋音も同理由から guiô が頻用されたが、唇音では遅れていたために -iô よりも -êô が優先され、カ行軟口蓋音・ラ行歯茎音では拗長音化の過渡期にあって -êô と -iô のいずれもが用いられたと考えられる。

【図2】ローマ字本キリシタン資料と抄物における合拗長音表記の対照

頭子音	b　m　f	r	q　gu	g　x　j　ch　nh
調音点	唇	歯茎	軟口蓋	歯茎
キリシタン	-eô　多	-eô　少	-iô　多	
抄物	eウ　多	eウ少	iヨウ多	

【図3】ローマ字本キリシタン資料での合開拗長音表記と開拗長音表記の対照

頭子音	b　m　f	r	q　gu	g　x　j　ch　nh
調音点	唇	歯茎	軟口蓋	歯茎
合拗長音	本則表記 -eô 多	-eô 少	-iô　多	
開拗長音	異例表記 -eô 多	-eô 少	-iô のみ	
硬口蓋化	←不完全硬口蓋化→		←完全硬口蓋化→	

こうした合拗長音表記 -eô・-iô は、【図3】の通り、開拗長音表記 -eô・-iô の分布とほぼ並行的に現れている。ェ段音の残存を示す -eô と -eô は不完全硬口蓋化を起こす頭子音に、拗長音を示す -iô と -iô は完全硬口蓋化を生じる頭子音に偏在する。すなわち合拗長音 -eô・-iô、開拗長音 -iô・-eô は、共に硬口蓋化の差を反映しており、その出現分布は、両者が体系立っていることを示しているといえるのである。

注

（1） 竹村（改稿中）に詳述。本稿三・二節に概略を記す。

（2） miô〜meô（見う）、iqiô〜iqeô（生けう）のような「上一・上二段動詞＋助動詞ゥ・ウズル」でも -iô〜eô でゆれる例がある。しかしこれは本文（2）の -eu>yoo の拗長音化におけるゆれとは異なる要因に属するため調査対象外とした。なお『日葡辞書』ではこの類が『平家』二〇七頁からの引用一例のみであるため（森田一九八〇・八四九頁参照）、調査結果には影響しない。また、-eô でしか現れない vreôru（憂ふる）と「下二段動詞＋助動詞タ（ダ）」も調査から除外した。

（3） qiôquai（交会、38頁）は qiôquai の誤り（橋本一九二八）。

（4） 上二段動詞・下二段動詞・サ変動詞を指す。

（5） ハ行以外の四段動詞、及びナ変動詞を指す。

（6） これに加え、当時のポルトガル語に i と e を通用する表記慣習があったことも -eô・-iô に音声差を認めない遠因となっている。森田説と同見解には、福島（一九七九）等がある。

（7） 参考に他の邦訳も掲げる。「Qeô よりは Qiô と言ってIを以て発音した方がよい。」（土井一九六〇）、「Qeô よりは Qiô と、i に発音した方がまさっている。」（亀井一九七三）。

（8） 『日本大文典』（巻二・178）では、Chô, giô を、Teô, deô 又は Theô, dheô のように発音すべきであると記す。この記述につき亀井（一九三七）は、殊に「捨てう（ず）」「出う（ず）」のような未来形では何時までも語幹意識が働いて、このように完全にアフリカータ化し得ぬ場合があったと推定する。本稿もこれを支持するが、キリシタン資料ではウ・ウズルも含めタ行全般に chô を使用することから、以下 chô で統一して扱う。

（9） 他、nhô［寝う］（本篇「DE」）、xinjôzu.※［進ぜうず、※ô は ô の誤り］（本篇「Fuxiguina. l, fuxiguino」）の二例も存在する。語根末が歯茎音 n の際にも拗長音化するのは、本稿の結論とも齟齬をきたさない。

（10） 「完全硬口蓋化」「不完全硬口蓋化」の用語とその説明は、神山（一九九五・七九-八一頁、一四八-一四九頁）に拠る。

（11） 調査にはオックスフォード大学ボードレイ文庫本影印（勉誠社、一九七三年）を使用。オ段拗長音部分に開合の誤りを含む用例は除外した。

（12） p̣ は、熟語の後部要素で音形が変化するものに現れやすいが、ローマ字本キリシタン資料では、なぜか Ippiô（一俵）のように -iô をとる傾向にある。この規則性が何に拠るのか不明のため、以下、p̣ は考察から除く。

（13） 除外した用例は、本文（2 b-c）の類、計22例。内訳は、見出し語4（ウ音便が ḃ-1例、gu-3例）、説明文18（ウ音便が ḃ-1例、gu-2例。下二段動詞へのウ・ウズルの後接例が ḃ-3例、gu-1例、q-5例、r-6例）。

（14） ｉョウは11例だが、内訳は四語（接輿（セウヨ）7、少連1、召忽2、少者1）しかなく、しかも特定の人名に偏っている点に注意される。

（15） こうした遅速については、今泉（一九六八）も言及している。

調査文献（日葡辞書以外は五十音順に排列。傍線部が略称名）

キリシタン資料：『日葡辞書』（勉誠社）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）、『天草版伊曽保物語』（勉誠社）、『金句集四種集成』（勉誠社）、『天草版平家物語（上）』『同（下）』（勉誠社）、『キリシタン版ヒイデスの導師』（清文堂出版）、『コリャード懺悔録』（風間書房）、『コリャード日本文典』（風間書房）、『コンテムツス・ムンヂ』（勉誠社）、『サントスの御作業』（勉誠社）、『スピリツアル修行の研究　影印・翻字篇』（風間書房）、『どちりなきりしたん総索引』（風間書房）［略称名：ドチリナ（1600年）］、『日本小文典』（新人物往来社）、『日本大文典』（三省堂）、『日本文典』（勉誠社）、『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』別冊（東洋文庫）［略称名：ドチリナ（1592年）］、『羅葡日対訳辞書』（勉誠社）抄物：續抄物資料集成『杜詩続翠抄（一）』『同（二）』『同（三）』（清文堂出版）、『論語鈔』成簀堂叢書第十篇（民友社）

主要参考文献

太田亨（一九九九）「『杜詩続翠抄』について」岡村貞雄博士古稀記念中国学論集刊行会編『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』白帝社

出雲朝子（一九六一）「成簀堂本論語抄におけるオ段拗長音の表記について」『未定稿』九

今泉忠義（一九六八）『日葡辞書の研究　音韻』桜楓社

神山孝夫（一九九五）『日欧比較音声学入門』鳳書房

亀井孝（一九三七）「室町時代末期における多行音の口蓋化について」『方言』七-七

――――（一九七三）『日葡辞書』勉誠社

阪田雪子（一九五五）「天草版伊曽保物語におけるオ段拗長音のローマ字綴字法をめぐって」『東京女子大学日本文学』三-五

迫野虔徳（一九六八）「仮名文における拗音表記の成立」『語文研究』二六

高羽五郎編（一九五〇）「付録」『サントスの御作業　翻字編』二巻二、国語学資料刊行所

高松政雄（一九七一）「オ段拗長音」『国語国文』四〇-七

高見三郎（一九七七）「杜詩の抄のことば――表記・音韻を中心に――」『国語国文』四六-四

竹村明日香（改稿中）「日葡辞書の開拗長音」未公刊

土井忠生（一九四二）『吉利支丹語学の研究』靖文社

――――（一九六〇）「解題」『日葡辞書』岩波書店

橋本進吉（一九二八）『吉利支丹教義の研究』東洋文庫

福島邦道解説（一九七九）『サントスの御作業　翻字・研究篇』勉誠社

森田武（一九五五）「吉利支丹資料のローマ字綴――日葡辞書・ロドリゲス大文典を中心として――」『国語学』二〇

――――（一九八〇）「補説」『邦訳日葡辞書』岩波書店

――――（一九九三）『日葡辞書提要』清文堂出版

吉田澄夫（一九三七）「天草版金句集の発音について」『日本語の音声』六

付記

本研究は、財団法人松下幸之助記念財団より二〇一一年度の研究助成（助成番号一〇-〇四〇）を受けている。

（たけむら・あすか　本学博士後期課程）